

社会科では、長い日本の歴史の中でひつき	ようになりました。	そして、僕も「平和」について改めて考える	上げてしまうのは、そのせいかもしれません	自衛隊機の飛行音が聞こえると、つい空を見	なりました。兄が家を出てちょうど一か月、	り、ずっと一緒だった四人兄弟がバラバラに	る仕事に就く」と、航空自衛隊の自衛官にな	僕の四つ上の兄が高校を卒業して「平和を守	変わってしまったことといえ、今年は春に	て、我が家の鯉のぼりが元気に泳いでいます	今年も変わらずに「こどもの日」がやってき	れまでと変わってしまったこともあるけれど	の「であるかを実感する今日この頃です。こ	の日常が「幸せ」でどんなに「ありがたいも	ランドを走ることができ、そんな当たり前前	でも陸上競技部のみんなと汗をかきながらグ	の麓で、コロナ禍でさまざまな制限がある中	綺麗な青空と澄んだ空気の中に見える大山	「平和」のバトンをつなぐ
---------------------	-----------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------

りなしに争いが起こり、世界中が戦火の中に
あつた時代があつたことや、空襲に原爆投下
沖繩本土での陸上戦、たくさんの人々が亡く
なり、生きたくても生きられなかった子ども
たちがいたことを学びました。そして、戦後
の混乱の中で、子どもたちの幸福をはかる日
として制定されたのが「こどもの日」だそう
です。今年も穏やかに五月五日を迎えられた
事を思うと、「平和」を感じられる一日にな
りました。
今年は、終戦から七十六年、戦争という暗
く悲しい時代のトンネルを抜けてから、日本
は一度も戦争をしていません。太平洋戦争、
それは昨年百六歳で亡くなった僕の曾祖父へ
大じじーがまだ若かった頃の話です。大じじ
は戦争体験者でした。僕たち四人のひ孫との
挨拶は敬礼で、いつも元気で笑顔でスピー
ポジティブな僕たち家族のパワースポットの
な存在の大じじが、戦争に行っていたことを
僕は知りませんでした。兄たちが聞いた事が

あつたそうですが、僕は小さかった為、覚えていません。聞きたくても今となつては、大じじに聞くこともできないのです。残念がる僕に母が大じじの残してくれた大切なアルバムを見せてくれました。それは、革張りの立派なアルバムで表紙には、戦車や騎馬隊、落下傘、戦闘機から落ちる爆弾、日の丸や星条旗が描かれています。いざ、アルバムを開くためには、勇気が少し必要でした。開くとすぐ軍服姿で胸にいつぱいの勲章を付けた凛々しい大じじの姿がありました。戦友との写真には、肩を組んで笑いあう写真も多く、まるで僕たちの卒業アルバムの写真の様で、七十年以上の時間が過ぎているようには思えないくらい、親近感が湧いてきました。しかし、更にページをめくり進めると、戦友との別れ：と書かれた写真があり、写っていたのは戦死した戦友の棺と祭壇でした。包帯が体中に巻かれ負傷した人の写真もありました。そして砂漠の骨、万里の長城・満州の風景、シベ

リア鉄道なども写真で残されていました。そこには、戦争の過酷さと悲惨さがリアルに記録されていていました。大じじは、どんな思いでこれらの写真をカメラに収めたのでしょうか。それを考えると胸が痛くなりました。きっと撮りたくて撮ったのではない、写真を通して戦争体験を後世に残さなければ、との使命感で撮ってくれたのだと思うのです。写真は、「平和」の大切さを静かに、でも力強く伝え、昭和三十九年、平成、令和と四つの時代をいつも前向きに生き抜いた大じじを僕は誇りに思います。そして、これからは、戦争を知らない僕たちが、「平和」というバトンを持って、僕たちが子どもたちにも、そのまた子どもたちにも戦争のない平和な世界を繋いでいくと誓います。今度、大じじの墓前で「平和のバトン、しっかりと受け取ったからね。」と伝えてきます。